NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

Vascular Street Journal

Vascular Street → Vascular Street Journal
機関誌名が変更になりました。

特集

公益財団法人
臨床研究奨励基金 35 周年記念祝賀会

はじめに（朔）

「公益財団法人 臨床研究奨励基金」は、医学･医療、生命科学（歯学、薬学、看護、福祉、医療管理等の関連領域を含む）に関する研究や技術開発学術集会や市民啓発活動、また人材育成及び国際交流を助成することによって、医学及び医療技術の進歩に寄与し、社会の公益増進を目指すことを目的として設立された公益財団法人です。私たち大学人が研究や学会活動を行うのに、とても重要な公的機関ですが、今回はその設立 35 周年の記念祝賀会を特集させていただきます。ホテルニューオータニ博多で、100 名を超える各界の方々に集まっていただきました。

司会　私は当財団の専務理事を務めさせていただいております、福岡大学医学部長の朔です。本会の司会を務めさせていただきます。初めに、設立時より会長としてご尽力されました、鎌田迪貞会長よりご挨拶をお願いします。鎌田会長は、九州電力の代表取締役社長･会長、現在、顧問を務められておられますが、福岡大学理事長も歴任をされ、2018年5月に皇居にて陛下より、平成最後の旭日大綬章、昔で言うところの勲一等を授与されておられます。鎌田会長、よろしくお願いします。

【財団鎌田迪貞会長　挨拶】

ただいまご紹介を頂戴致しました、財団の会長を仰せつかっております、鎌田でございます。本日は、「公益財団法人　臨床研究奨励基金」の創立35周年の式典に皆様おいでいただきまして、誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。臨床研究奨励基金は、福岡大学病院の創立10周年の記念事業として、昭和59年3月に設立されたもので、このたび、35周年を迎えたところでございます。こ

NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

の35年間に財団が行いました助成の実績について申し上げますと、助成の総件数が1,363件、助成総額が45億314万円でございました。このように、大きな助成活動ができましたのも、本日、ご出席の皆様方の絶大なるご支援、ご協力のおかげでございます。特に、財団設立当初について申しますと、本日もご出席頂いておりますが、地元の企業の皆様方に基金の設立のために、資金面で大変なご協力をいただきました。また、福岡大学病院と関係の深い医療、医薬品関係の企業の皆様にも大きなご支援をいただきました。そのおかげで、構想からごく短時日の内に助成活動を始めることができたわけでございます。発足後、ほぼ10年間は高金利時代でして、基金の運用利息で助成活動を、つまり、助成のための資金を賄うことができました。しかし、バブルがはじけ、日本経済が長期停滞の時期に入りますと、ゼロ金利やマイナス金利、低金利時代となり、助成活動も極めて厳しくなったのでございます。そこで、それまでは、ほぼ福岡県内での事業範囲を、九州全域に広げ新たな展開を図ったのでございます。それによって、今日まで、助成活動を続けることができました。この事業範囲を福岡県外の他地域に広げたことにより、国の新法人制度の改正に伴いまして、平成25年4月1日より公益財団法人へ移行しております。今後も九州全域を中心に、特に若い研究者たちに対して、研究助成・人材育成助成・国際交流助成等々の活動を継続したいと願っております。皆様方の変わらぬご支援を何卒よろしくお願いいたします。本日は、ご出席、誠にありがとうございました。

朔　鎌田会長、ありがとうございました。
それでは、現在の当財団の理事長である福岡大学総合医学研究センターの西村良二教授より皆様にご挨拶がございます。西村先生、よろしくお願いします。

【西村理事長挨拶】

財団理事長の西村でございます。当財団もおかげさまで35周年を迎えることになりました。このように長きに渡って財団が助成活動を続けることができましたのも、大学の皆様を始め、理事、評議員、審議会委員を快くお引き受け頂いた学識経験者の皆様、ならびに九州の財界の皆様方の温かいご支援の賜物だと深く感謝しております。当財団の目的は、臨床研究の助成です。また、若い研究者の育成、人材育成事業です。主に福岡を中心に九州・沖縄・山口の範囲で活動して参りました。財団の設立は1984年で、特定公益増進法人として発足し(表1)、早速1984年から臨床研究の助成を開始しております。1987年からは人材育成事業として、日本人海外研修助成、外国人学者招聘助成始めております。1993年ごろから特別研究助成と学術集会助成を始めております。表1のように、いくつかの活動をして参りましたが、赤色の字の活動は現在も継続している活動です。新しい事業としては2018年から若手外科医国内外研修助成を始めております。また現在、コメディカルに特化した臨床研究の助成を検討しているところでございます。

財団の設立と活動の経過

1984.3	福岡県知事認可の特定公益増進法人として発足
1984	臨床研究助成
1987	日本人海外研修助成、外国人学者招聘助成
	年報1号発刊
1990	看護婦海外研修助成(1995まで)
1993	特別研究助成
	学術集会助成
1999	事務所現在地へ移転
	治験審査倫理委員会
	臨床医学・生命環境研究所
2000	アジア医学交流助成
2013	法人法の改正により内閣総理大臣認可の
	公益財団法人へ移行
2018	若手外科医国内外研修助成
2019	コメディカル臨床研究助成を予定

表 1

図1は臨床研究助成活動の明細です。横軸は年度になっておりまして、折れ線グラフが助成した臨床研究の数です。毎年10件程度の助成をしております。この緑色の棒グラフは助成の金額ですが、多い時で年間500万の助成をいたしております。当財団は2005年(平成17年)に設立20周年記念を行っておりまして、これからお見せするスライド資料は、

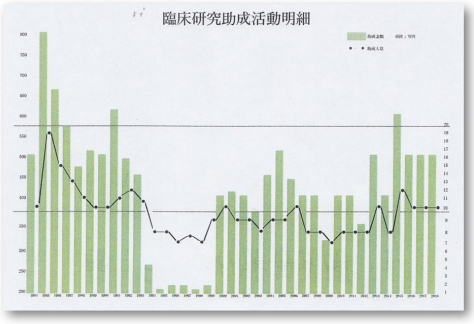

図 1

Editor: Keijiro Saku, MD, PhD, FACP, FACC

NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

20周年記念後の、この15年間の資料になります。臨床研究助成ですが、この15年間で108件、総額5,220万円の助成をしております。九州大学と福岡大学で4分の3を占めておりますが、これは、九州大学と福岡大学の応募件数が多いという理由でこのようになっています。また、日本人海外研修助成ですが、この15年間で11件、その総額は330万です。外国人学者招聘事業は13件、助成金額総額は390万人になっております。

学術集会助成と特別研究助成の推移(図2)を示したものですが、これはどういうものかと申しますと、まず学術集会助成ですが、学術集会を開催するのは大変費用がかかるわけですが、民間からの寄付金集めを財団が協力します。一緒に寄付金集めをするのです。特別研究助成というのは、研究テーマ、研究計画書を先に民間に提示しまして、その研究に対して寄付金集めを財団がお手伝いするというものです。図2の棒グラフの緑色のものが特別研究ですが、凹凸があるようですが、2005年に1億8,000万円の寄付金を集めましたが、それをピークに残念ながら右肩下がりです。この特別研究の内訳ですが、この15年間で197件、寄付金の総額は14億5,700万円となっております。それから、黄色い棒グラフは学術集会の助成ですが、2011年の2億円をピークに減少しております。

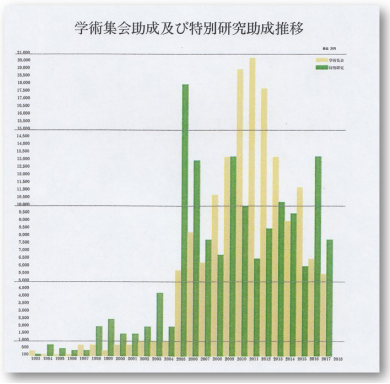

図 2

表2が15年間の内訳ですけども、15年間で383件の助成がありました(総額12億7,700万円)。これも九州大学と福岡大学で全体の47%を占めております。当財団としては、広報活動をより活発にして、知名度を上げて福岡・九州の公共財として、大いに活用していただきたいと願っております。よろしくお願いしたいと思っております。これをもちまして、理事長挨拶とさせて頂きます。どうも、ありがとうございます。

学術集会助成

2005(H17)～2016(H28)

施設名	助成件数
九州大学	85
福岡大学	95
産業医科大学	34
久留米大学	26
鹿児島大学	18
熊本大学	13
大分大学	11
宮崎大学	7
長崎大学	7
佐賀大学	3
九州医療センター	7
九州がんセンター	5
その他	72
計	383

助成金総額　12億7，700万円

表 2

朔　西村理事長、ありがとうございました。それでは、来賓祝辞、福岡県医師会会長　松田峻一良先生に代表していただき、来賓のご挨拶を賜りたいと思います。松田先生、よろしくお願いします。

【来賓祝辞　松田峻一良先生】

皆さんこんばんは。ただいまご紹介いただきました、福岡県医師会の松田でございます。本日は、公益財団法人　臨床研究奨励基金35周年記念式典にご招待いただきましてありがとうございます。福岡県医師会を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。本日、創立35周年の式典を開催されますが、多くの諸先輩方、また執行部の皆様方の大変なご努力に心から敬意を表するところであります。皆さんご存知のように、先ほど鎌田会長のお話にもありました。バブルがはじけて、そして各社の経済界のメセナ活動というのが非常にやりにくくなってきました。ただ、そういった中でも最近は景気が良くなりましたが、1つの事業に対してPDCAサイクルを回して、早く結果を得たい傾向にあります。しかし、我々の医療というのはそう簡単に結果は出ない。しかし、早く結果を出したい、早く結果を得たいという世の中で、我々の質の高い医学研究が、はたしてなし得るのか、ということを非常に危惧しております。そして、若手の研究者たちがそこに巻き込まれてしまうことにならないか。そのような時代だからこそ、地に足がついた研究を本当にきちんとなされていく必要があると強く思っております。来月から「令和」という新しい時代がやって来ます。人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つというようにと、安倍総理も言っておられます。また、1人ひとりの日本人が明日への希望と共に、それぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいと考えます。財団の創設者である故　朝長正道先生も当時そのような思いでこの財団を創設され、そして人材育成に力を注いでこられたのではないかと思っております。医療とは社会の基盤であります。我々は、医療で、社会と人の生活を根底から支える責任があると考えております。そして、この医学・医療に携わるすべての団体が思いを1つにして、次の時代を担う若者たちが誇りと希望を持てる未来を形にしていかなければならない。そして、今後も優秀な人材を育成していただくため、財団のご活躍を心から祈念しております。最後になりましたが、当財団の益々のご発展と鎌田迪貞会長、そして西村良二理事長をはじめ、本日お集まりの皆さんのご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私の挨拶とさせて頂きます。本日は、おめでとうございます。

朔　松田会長、どうも有り難うございました。

NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

それではここで祝電がたくさん来ておりますので、皆さまにご披露させていただきます。

◎臨床研究奨励基金会長 鎌田様、理事長 西村様

「公益財団法人臨床研究奨励基金の創立35周年、誠におめでとうございます。昭和59年に本件許可の公益増進法人として発足し、今日までに医学・医療・生命科学の研究、人材育成などの分野で多大なご貢献をいただき、深く感謝を申し上げております。今後も県民が健康で幸福に暮らせる社会の実現に向かって、ご協力を賜りたくお願いします。」

◎福岡県知事 小川洋様

「創立35周年おめでとうございます。記念祝賀会が盛大に開催される事を、心よりお祝い申し上げます。今後の益々のご発展を祈念いたします。」

日本医師会長 横倉義武様。九州大学名誉教授学校法人福岡大学理事長 水田祥代様。その他に、たくさんの祝電をいただきました。本当にどうもありがとうございました。

それでは、35周年記念特別研究助成授与式を始めさせて頂きます。

◎大江美佐里先生

「小児期の心的外傷が成人期の感情認知に与える影響、病理基盤解明」

◎長田良雄先生「寄生虫による自己免疫性関節炎抑制機構の研究」

◎石井敦士先生

「経静脈的にゲノム編集技術を用いたドラベ症候群の遺伝子治療の開発」

◎伊藤隆先生「血漿セルフリー DNA の構造と修飾の網羅的解析」

平成31年4月19日、財団代表 西村良二。おめでとうございます。

朔 それでは、受賞者を代表して伊藤先生に一言お願いいたします。

伊藤 九州大学の伊藤でございます。受賞者を代表させていただいて、一言御礼を申し上げます。この35年という非常に長い伝統を誇るこの財団から、この節目の年に研究を表彰していただいたということは、私ども今後の研究の大きな励みになろうかと思います。心より御礼を申し上げたいと思います。私自身が研究生活に入りまして、今年でちょうど35周年でございます。私は昭和59年卒業でございますので、何か縁のようなものを感じております。この財団に表彰していただいたことを励みに、またいっそう研究に励んでいきたいと思っております。本日は、本当にありがとうございました。

Prof. Saku's Commentary

財団創設者 故 朝長 正道 前理事長
Masamichi Tomonaga, Prof.

「公益財団法人 臨床研究奨励基金」の創設者は、元福岡大学病院長、元福岡大学医学部脳神経外科学講座の主任教授である故朝長正道福岡大学名誉教授です。私は、医学部卒業の1～2か月前、朝長先生から脳外科に入局するようにかなり強く勧誘されました。臨床小講堂のドアの前でしたが、羽交い絞めにされるように、かなり長い時間だったように感じてます。私は、朝長先生の期待に応えず、循環器内科に進んでしまいましたが、そのことを今も、ありありと覚えています。また、私が39歳の時、救命センター病院教授選挙に出たことがありますが、この時は大敗しました。その次の日に廊下で朝長先生にお会いした時に、何も言わずに私の白衣のボタンを留められながら、頭を縦に振っておられました。「頑張れ」と言われたかったのが伝わってきました。先生は平成23年に急性心筋梗塞で福岡大学病院に入院され、その後私の外来でフォローさせていただきました。植え込み型除細動器、当時新型の抗凝固薬も使わせていただきましたが、膵臓癌でお亡くなりになりました。もっと早く見つけてあげたらと後悔してます。88歳2か月、亡くなられるほんの少し前にご長男の朝長啓造京都大学教授（ウイルス・再生医科学研究所）が、野口英世賞を受賞されるので、猪苗代まで授賞式に参加されました。「行っていいか？」と何度も聞かれたのですが、行くべきであるとご進言させていただきました。帰福後、きつかったのでしょうね、入院されましたが、ご子息の受賞を心から嬉しく、誇らしく思われておられました。「公益財団法人 臨床研究奨励基金」の行く末を死ぬが死ぬまで案じておられましたので、盛大な35周年祝賀会を開催させていただきました。皆さまのご参加を心から感謝いたします。また、今後、当財団のさらなる発展・継続に、鎌田会長、西村理事長、財団理事、評議員の方々とともに、尽力させていただきます。

ご長男： 朝長啓造教授
（京都大学ウイルス・再生医科学研究所）

第60回野口英世記念医学賞授賞式にて
平成29年11月12日

於、福島県猪苗代町の野口英世至誠館

Editor: Keijiro Saku, MD, PhD, FACP, FACC